

「とにかく、お前の家と違って俺のところは母さん一人で大変だから、バイトは必須なんだ。大学だって奨学金だから、就職したら毎月の返済が……って、さっき、なんて言った？ 政司」
優耶は、政司にぐいと顔を寄せて尋ねた。

「もう船と宿を手配した。容子さんからも、息子を遊ばせてやってくれと頼まれているんだ。俺と一緒にひと夏の思い出を作りに行くぞ」

「母さんまで引き込むな……いや、お前が母さんに引き込まれたんだな。すまない」

「俺はお前の母親は結構好きだ。美人なのにあれだけ面白い人もなかなかいない」

優耶の母は、黙っていれば確かに美しい熟女だが、言動がすっかりオバサンなので残念な美形熟女だ。「生涯現役」を信条に、看護師として働いている。

「俺の知らないところで母さんとあまり仲良くしないでくれ。何かあったら困る」

すると政司は「ふん」と鼻を鳴らして、「俺がお前以外の人間に惑わされるか」と、またしても偉そうに言った。

「そういう台詞も、誤解を招くからやめなさい」

「俺は常に本気だ」

「はいはい」

優耶は政司の本気を右から左に聞き流し、アイスコーヒーを飲み干した。

「土曜日の午前十時の大型船に乗って、翌日朝の九時に親待島おやまちとうで下船。そこで船を乗り換えて、雪待島ゆきまちとうに到着するのは夕方の五時だ」

政司はそう言いながら、デイパックの中からパンフレットを引っ張り出した。

「約三十時間も船なのか……って、本当に用意がいいな、お前」

「お前が動かない代わりに動いてやったんだ。段取り上手な俺って素敵」

「ははは」

優耶は笑って、「二杯目を買ってくるが、お前は？」と尋ねる。政司は「今度はクリームソーダがいい」と言って、優耶に小銭を握らせた。

「余計に喉が渇くぞ。今日は暑い。俺はオーガニック麦茶を飲むから一緒にしなさい」

「……優耶がそう言うなら、仕方がない」

「はいはい」

優耶は飲み終えたグラスとトレイを持って立ち上がった。

注文を終えて戻って来た優耶は、二人分の麦茶とポテトフライのし、サルサのディップが載ったトレイを政司の前に置く。

「気が利くじゃないか」



「長話になりそうだったからな」

「まあな。……『親待島』『雪待島』なんて、曰くいわがありそうだ」

政司は麦茶にストローを差し、ほくほくのポテトフライにサルサをつける。

「小説のネタになるといいな」

「そのつもりだ」

政司は、エンターテインメント小説家としての肩書きも持っており、最近売れ始めた若手作家だが、彼が作家だということは両親と優耶しか知らない。

担当編集も「謎の作家で行きましょう。面白いから」と、楽しそうだという。

「曰く付きの島にある遺産を見に来た学生とその友人が体験する、不思議な世界の話とか。孤島の旧家殺人事件とか」

政司はニヤニヤしながら、どこかで聞いたことのあるあらすじを並べていく。

「殺人事件なんてやめてくれ。この間の窃盗事件だって犯人は捕まっていんだぞ？ 近所なのに怖いじゃないか」

優耶は唇を尖とがらせる。

「ああ……宝石泥棒だっけ。家人を殺さずに宝石だけを盗むって、ドラマの怪盗みたいだ。いいな、怪盗か……」

「分かったから、交通費と宿泊費はいくらかった？ 払うから言ってくれ」

「俺が強引に連れ出すんだから気にするな」

「親しい仲でも、金銭の貸し借りをナアナアにしてはいけない。俺の性格を分かっているなら、ちゃんと請求してくれ」

優耶は淡い色の目で政司の顔を覗き込み「な？」とダメ押しをする。

「分かった。宿は何日宿泊するか分からないから予約しか入れていないんだ。だから、まとめて後日請求することでもいいか？」

「ああ」

「お前が俺のものになるというなら、請求はしないが」

「俺は物じゃないぞ、政司。……しかし、どうして雪待島という場所に別荘を建てたんだろうな、俺の祖父さんという人は」

そう言つて、優耶はポテトフライを口に運ぶ。

「資産家だったから……としか言いようがない」

「そうか。……母さんには何も残してくれなかったのに、なんで俺なんだろう」

「孫は可愛いと、よく言うじゃないか」

政司は、「つまらないことを聞くな」と眉間に皺を寄せた。

「本当に行くのか？ 別に俺は……誰か代理の人に行ってもらっても……」

「行くぞ。……別荘の管理をしている人間がいるそうだが、どんな管理をしているやら。小説

のネタにしかならない廃屋はいおくだったら、更地さらちにして売るのが得策だ」

「余計金がかかりそうな……」

「親戚連中もそう思ったんじゃないか？ だから、お前が別荘と土地を相続しても、『縁を切ったくせに』と詰め寄ってこなかったんだと思う」

「そうだな。……何かあったら売ってしまえばいいんだ。そうか。残る物をもらっても困ると思っていたんだが、金なら構わない。やつぱり政司は頼りになる。ありがとう」

優耶は納得したように何度も頷うなずいて、政司に微笑ほほえみかけた。

「そんな顔で俺を見るな。押し倒すぞ」

「殴り飛ばすから大丈夫だ」

「なんで俺の気持ち伝つたわらないんだ？ まあ、そういう鈍いところもひつくるめて、俺はお前を愛あいしているぞ」

政司の大仰おおきような台詞に、待ち合わせをしているらしい隣のテーブルの女子たちが振り返る。

彼女たちは声の主が政司だと分かったと、「なんだ、黒騎士様のいつもの冗談か」と肩を竦めた。

「相変うつろわらずの有名人だ」

「鬱陶うっとうしいだけだ。俺は優耶だけに見つめられていたい」

「それは難しい相談だ」

「べつたりとくつつくように、俺の傍にいればいいんだ」

美形のふくれっ面はなかなかお目にかかれない。

優耶は「面白い顔だ」と思いつつ、ポテトを口に押しこんだ。

「俺の為に花嫁修業をしろ」

「花嫁修業は面白いと思うが、大学を卒業したら就職をしないと奨学金の返済ができないからな」

「アメリカでも花嫁修業はできる」

政司は日本の大学を卒業したら、建築を学ぶためにアメリカの大学に入学するのだ。もちろん、小説のネタも仕入れる予定だ。

「お前の帰りを日本で待ってるよ。行くのに金がかかるし、料理が大したことなさそうだ」

「ああもう、優耶は可愛くない」

「こんなガタイのいい男が可愛くてたまるか」

優耶は低く笑って、パンフレットに手を伸ばす。

雪待島観光案内と書かれた文字の下に、島の名前の由来が書かれていた。

雪国出身の領主が、雪を恋しがつて「雪待」と島の名前を変えたそう。

海と山の、両方のリゾートが体験できると書かれている。

「海で泳ぐのは久しぶりだが……」

「ビキニを持ってこい、ビキニを」

政司の声に、傍に座っている女子がクスクスと笑う。

このやろう。お前のベースに乗るしかないのか。

優耶は「日焼けあとが気になるから、ビキニはダメだな」と真面目に答えた。

何人かが噴き出す声が聞こえる。

「……場所を変えるか」

黙っていても目立つ容姿と言動のくせに、政司は注目を浴びるのがあまり好きではない。

優耶も同じなので、「了解」と頷いた。

「土曜日は車で迎えに行くから、用意をして待ってろ。いいな？」

二人は同じ町内に住んでいるが、優耶の住まいはアパートで、政司の家は豪邸だ。

商店街の手前で、左右の道に別れる。

「申し訳ないが、よろしく頼む」

「キス一つで何もかも許してやるぞ」

「それはまたの機会に」

優耶はポンポンと政司の肩を軽く叩き、「じゃあ土曜日」と言ってきたきびすを返した。